

ミャンマー多国籍軍

岡本 悠

ゆうべ、は、旅に出た、アジアの後進国へ

父親の紹介で、知り合った女性の娘さんは、瞳さんという

ミャンマーで、日本語教師として、働いていた

話は、トントン拍子で進み

ゆうべ、は、ミャンマーに行くことに決まった

タイ経由で、ミャンマーに着いた

ヤンゴンである、首都だ

空港では、列に並んでいたが

ビビッテしまい

列を外れて、最後尾についてしまった

もう、相当の時間が経った

ああ、失敗したな

...

ようやく、最後の1人で、検問をくぐった

そしたら、瞳先生と、その生徒のミャンマー人の青年が待っていた

嫌な顔ひとつせず、迎え入れてくれた

その日は、そのミャンマー人の青年の運転する車で、ホテルまで送ってもらった

瞳先生の日本語学校の教室には、ミャンマー人の生徒で溢れていた

瞳先生が早口な日本語で、話し、テストをするという

「ゆうべ君もテストする？」ということで、日本語のテストをした

生まれて初めての100点を取った

嬉しかった

バットとボールを寄贈した

ミャンマーは、基本的に雨が続いた

ゆうべ、は、ミャンマーの高級料理ばかりを食べた

エビやら、なにやら、酒も飲んだ

朝は、基本的に起きられない

ベッドメイキングのミャンマー人の女性に来るが、かまわず寝ている

その女性は毎日困っていた

チップもあげたかったが、ミャンマーのお金の読み方すらわからなかった

瞳先生たちと、遊園地に遊びに行った

日本よりかは、明らかに時代遅れの乗り物だったが

ジェットコースターなどは、それはそれで楽しいものであった

ゲームセンターも、時代遅れの「ストリートファイター」があった

食事をすると、絵を描いてもらった

フニャフニャな顔の絵だったが

瞳先生は、「もっと、かわいく描いて欲しかった」という、様子だった

ゆうべ、は、日本の「三瓶です」というギャグをやったが、

どうということもなかった、ゆうべ、は、少し恥じた

ある朝は、瞳先生から、ホテルに電話が来たが、雨が降っていてダルかったので、日本語学校へ行くのを断ってしまった

ある時は、車の中で体調が悪くなり、ずっと下を向いていたこともあった、でも、その時は、本当に調子が悪かった、鬱鬱としていた

ホテルを出て、ヤンゴンの街へ1人で出てみた

街は活気に溢れている

これが、働くということか

ゆうべ、の、心は、唸った！

靴を履いているのは、日本人の自分くらいだった

だから、店の中を歩いていると、

酒瓶を持った、少年が、「酒を買ってくれ」と近寄ってくる

それを断るが、ひきさがらない

しばらく、歩いていたら群れができた

そして、さっきの少年が、ここまでついてきたのか、という感じで、追いかけてきた

ゆうべ、は、断ると、そそくさと逃げた

スーパーでは、お金の払い方がわからなかったので、女店員に、財布の札束を全部出して並べて、精算してくれとやったが、困ってしまっていた

ヤンゴンの道では、ある一人の男性が、俺を案内してくれたが、ついていくと、いろいろなところに、連れていってくれた

しかし、最後に「じゃあ、お金をくれ」と言われたが、最終的にわからないので、断ってしまった、その男性は呆れるように怒ってしまった

翌日、道で会ったが、無視をしていた

川の傍の道で、飴を一人の少年に上げたら、どんどん少年が集まってきた、ヤバイと思い逃げた

公園に行った時は、数人が野球をやっていた、ゆうべ、は、いつかは、ミャンマーも、日本のように、野球が強くなったらいいな、と思った、監督になって日本を負かそうかとも、よぎったが、まったくの空想に終わった

飲み物、チャイがあまりにもおいしいので、溜め買いして冷蔵庫に入れた

ミャンマーでも、アメリカンプロレスの WWE が流行っていたのには、驚いた

瞳先生の、ミャンマー人の生徒の紹介で、ミャンマー人の女の子を紹介してもらった

ティーさんという

彼女は、日本語がよくわからなかった

俺が、身振り、手振り、必死に喋っても、ゆっくり喋っても、よくわからないようだった

俺は、その日、瞳先生に、ティーさんを紹介して、日本語を習ったらどうだと進めた

瞳先生は「紹介してくれて、ありがとう」と云ったが、ついでに

「ゆうべ君は、面食いだね」と言った

ホテルの 19 階から、街を眺めた

外は、雨が降っている

俺は、ベッドに仰向けになった

垂直に

そして、人生について考えたが

何を考えたかは、忘れてしまった

瞳先生たちにサヨナラを言って、東京へ帰った

...

しばらくして、実家に、ティーさんから手紙が来た

読んだ、嬉しくて、返事を書いた

そして、電話した

あの、純粋な子が、どんな風に喋るだろう

と思ったら、汚い大阪弁だった

俺は、あれっ？ と思った

でも、大阪に来なよ、私が案内してあげるから、と言うので

大阪で会うことになった

新幹線に乗った

窓ガラスには、水玉が走った

そして、山を見ながら、いつか、俺も山に登るのかな？ と、面倒臭そうに思った

大阪に着くと、携帯電話で探していたら、ティーさんを見つけた

そして、2人で、南京町へ行った

食べたあとは、カラオケに行ったが、日本の歌を流暢に歌っていた

マッサージ屋に行くと、ティーさんはとても、嬉しそうだった

大阪のたこ焼き屋では、店の店員が、自分たちで作れと言う

俺も、ティーさんも、上手く作れないので困っていると、

イライラした様子で、こんなのも作れないのかという感じで

男の店員は、たこ焼きを回した

でも、大阪にもいい人はいて、ティーさんと2人で歩いていたら、「仲良しね」と、話かけてくる、おばあさんなどもいた、そういう関係ではなかったが、

その日は、そのまま解散した

翌日は、京都と一緒に言った

雨が降っていたので、最初はバス停に並んでいたが、タクシーを拾っていった

清水寺に着いた

時代は「嵐」。ポスターを買ってあげた

スマホなんてない時代だから、インスタントカメラで写真を全部使った

舞妓さんは、やはり「象徴」。



綺麗なのかはよくわからないが、記念に写真を取った

帰りは、最後の別れとなった

最後、振り向いて手を振ると

ティーさんは、手を振ってくれた

また、振り向いても

手を振ってくれた

最後まで、見えなくなるまで、手を振ってくれた...

その後、また、電話で話をするようになった

ちょっと、偉そうになった気がした

自分が、見下されているように感じた

でも、ティーさんも、日本で苦しんでいるのかもしれないとも感じた

彼氏もいっぱいいる、とってたような気がする

挑発的な態度で、電話をするから

イライラしてきた

わかったか、あー、あー、あー

と言ってきた時、

俺は、電話をブチッと切った

その後は、向こうからも電話が来ることはなかった

あれから、10年以上経った

よく思う、瞳先生に、また会いたいなど、

あの時、もっと、こうしておけば良かった

例えば、なんで、あの時、部屋に籠って、せっかくの旅行を、もっと充実して使わなかったのだろう

落ちこんだのは、しょうがないにしても、もっと、こうしてれば...

今ならばもっと...

ティーさんとは、やっぱり、上手くいかないかも な、今でも、

でも、最後まで、手を振ってくれ たり、大阪や京都を案内してくれた

俺にだって、落ち度があったはずだ

ミャンマーに降る雨は なんだか憂鬱

窓ガラスの景色を 見つめていた...

お金くらいは、ちゃんと払えるように、しとけばよかったよ...

「完」